

「エミリーへのバラ」再考

石川和代

William Faulkner's "A Rose for Emily" Reconsidered

Kazuyo ISHIKAWA

(1)

「エミリーへのバラ」はウィリアム・フォークナーの短篇のうち最も有名なものである。この作品は1930年4月に「フォーラム」誌に発表され、後に「これら十三篇」、「ウィリアム・フォークナー短篇集」などに再録され、またそのほかのほとんどすべてのアンソロジーにも収録されている。フォークナーは1929年の「サートリス」から1936年の「アブサロム、アブサロムノ」にいたるまで次々と長篇の大作を発表しているし、また短篇集も刊行している。この期間はフォークナーの創作力が最も充実した、フォークナー文学全体の中心をなす輝かしい時期であるといえる。「エミリーへのバラ」はそのような時期に書かれた作品であるので、フォークナー文学全体にも通じる問題点を含んでいると考えられる。この作品はフォークナーの短篇を代表するのみでなく、アメリカの現代短篇を代表するものとも言われており、多くの批評家たちによって批評されている。すでに研究されつくしていると考えられるほどであるが、そのような重要な作品であるからこそ、もう一度この作品のテーマである過去と現在の問題を中心に考え、私なりの意見を述べてみたいと思う。

(2)

この物語はヒロインのエミリー、即ちグリアソン家の唯一の存在エミリーの死から始まる。エミリーが死んだとき、町の人々はみな彼女の葬式に出かけて行く。男たちは“a fallen monument”¹⁾ に対する一種の敬愛の情から出かけて行くのであるが、女たちは少くとも過去10年間は年とった黒人の召使のほかには誰も見たことのないエミリーの家の中をのぞきたいという好奇心から出かけて行くのである。この冒頭の数行が南部の象徴ともいえるエミリーとその家に対する関心を読者によびおこす。これに続いて、エミリーの住む家とエミリーの生活について語られるのであるが、その家の描写は、過去の古いものと現在の新しいものの対照をうまく表わしている。

It was a big, squarish frame house that had once been white, decorated with cupolas and spires and scrolled balconies in the heavily lightsome style of the seventies, set on what had once been our most select street. But garages and cotton gins had encroached and obliterated even the august names of that neighborhood; only Miss Emily's house was left, lifting its stubborn and coquettish decay above the cotton wagons and the gasoline pumps—an eyesore among eyesores.²⁾

かつては白く塗られていたエミリーの家は、新しい頃は立派であったと思われるが、今ではす

っかり古びてしまっており、町へ近代化の波がおしよせてきたこの頃では、周囲にあるものとそぐわなくなっていて「目ざわり」である。そして「そのかたくなな、あだっぼい凋落の姿を、綿花を積んだ荷馬車やガソリン・ポンプの上にそびやかしている」様子は、その中に住んでいるエミリー自身を象徴しているように思われる。

近代化した社会からとり残されているのはエミリーの家だけではなく、エミリー自身もまた時の流れに抵抗して、過去の世界にとどまろうとしている。町が無料の郵便配達を始めたとき、彼女だけは、自分の家の戸口の上に金属の番号札を貼りつけたり、扉に郵便箱をとりつけたりすることを拒む。外の発展に眼をつむってひたすら過去のものを守り続けようとしているのである。これはまた税金問題に対してエミリーがとる態度についてもいえることである。エミリーの父親が死んだ1894年のある日、当時の市長であったサートリス大佐が、エミリーに対する税金を特別に免除することを決めた。だがもっと近代的な考えをもった、次の世代の人間が市長や市議員になるようになって、この取り決めに対して不満が生じてくる。それで彼らはエミリーに税金の通知を出す、彼女からは何の返事も来ない。こんどは、都合のよい時に保安官事務所へ出頭するよという通告を出す、外出しないという手紙が来て、税金の通知書も同封されているが、それには一言も触れてない。仕方なく市議員の代表が彼女の家を訪れることになるのだが、エミリーは“See Colonel Sartoris. I have no taxes in Jefferson.”³⁾ と言う。サートリス大佐は実際には10年前に死んでいるのであるから、会えるわけがないのだが、彼女は訪れた市議員たちに向かって、“See Colonel Sartoris.” と言いつけるのである。このようにかたくなな態度をとるエミリーはジェファソンの町にとって“a tradition, a duty, a care”⁴⁾ といった存在であった。そして、エミリーが市長に出した“a note on paper of an archaic shape, in a thin, flowing calligraphy in faded ink”⁵⁾ は、過去に固執するエミリーにふさわしいものである。また近代化した社会からとり残された古さは、エミリーの家内部の描写にも見られる。

They were admitted by the old Negro into a dim hall from which a stairway mounted into still more shadow. It smelled of dust and disuse—a close, dank smell. The Negro led them into the parlor. It was furnished in heavy, leather-covered furniture. When the Negro opened the blinds of one window, they could see that the leather was cracked; and when they sat down, a faint dust rose sluggishly about their thighs, spinning with slow motes in the single sun-ray.⁶⁾

長い間使われなかったために、ほこりっぽく、むっとした、しめっぼいにおいがする家もまた、時の流れに抵抗しようとするエミリーが住むのにふさわしい家である。この家の内部の描写に続いて語られるエミリー自身の描写は、エミリーがこういった古くさい家に住むのにふさわしいということ、いわば、家とエミリーの類似性を巧みに表わしている。

She looked bloated, like a body long submerged in motionless water, and of that pallid hue. Her eyes, lost in the fatty ridges of her face, looked like two small pieces of coal pressed into a lump of dough as they moved from one face to another while the visitors stated their errand.⁷⁾

ここに「よどんだ水の中に長いことつかっていた死体のようにむくんで見えた」とあるが、こ

のよどみはまさに時間の流れの止まってできたよどみであり、エミリーがそのよどみにつかっていたことを象徴しているように思われる。時間の流れのよどみの中につかっているエミリーであるが、彼女が身につけている金鎖のはしには時計がついていて、カチカチ鳴っている。即ち彼女も実際は刻々と進む時間の流れからのがれることはできないのに、自ら無理に時の流れを止めて、そのよどみの中につかっていたのである。

エミリーは若い時からずっとこんな姿であったわけではない。彼女がまだ若く、父親が生きていたころのグリアソン家を町の人々はひとつの活人画として考えていた。

We had long thought of them as a tableau, Miss Emily a slender figure in white in the background, her father a spraddled silhouette in the foreground, his back to her and clutching a horsewhip, the two of them framed by the back-flung front door.⁸⁾

若いころエミリーは「白い服装のすんなりした姿」をしていたのである。しかしその前には父親が「前景に両脚を開いて踏んばって」立ちふさがっていた。そしてグリアソン家は“held themselves a little too high for what they really were”⁹⁾であると思われていたように、エミリーの父親は、エミリーの相手にふさわしいものなどいないといわんばかりに、彼女の結婚の機会を退けていた。

エミリーの時の流れに対する抵抗は父親が死んだときから始まる。彼女は父親が死んだ翌日に、町の婦人たちがお悔みを述べるために訪れたとき、ふだん着のまま、顔には悲しみの色ひとつ表わさず、父は死んだのではないと言う。彼女は3日間も父親の死体の始末をせず、法律上の強行手段に訴えようという瀬戸ぎわになって、あわてて死体を埋葬する。父親によって結婚の機会をとりあげられてしまった彼女は、父親が死んだら何も手もとに残らないわけであるから、せめても父親にすがりつかざるをえないのである。父親の死という現実を否定して、過去にしがみつこうとしているエミリーの姿をここに見ることができるわけであるが、死を否定するエミリーは税金問題に対する彼女の態度の中にも見られる。10年前にサートリス大佐が死んでいるのに、その事実を認識することを拒んで、「サートリス大佐にお会いになって下さい」と言い続けたことは、私が前に述べたことと思う。

父親が死んでから長いことエミリーは病気になるが、その後再び町の人々が見るエミリーは髪を短く切っていて、“a girl, with a vague resemblance to those angels in colored church windows—sort of tragic and serene”¹⁰⁾のように見える。それはこのときすでにエミリーが現実からはるかにはなれた“that nether-world”¹¹⁾に入りはじめていることを暗示しているようである。

エミリーの父親が死んだすぐあとの夏、町の歩道を舗装する工事の工夫監督として、ホーマー・バロンという北部人がやってきて、やがてエミリーはこの男といっしょに馬車でドライブに出かけるようになる。それを見て町の婦人たちは“of course a Grierson would not think seriously of a Northerner, a day laborer.”¹²⁾と口をそろえて言い、エミリーに気晴らしの相手ができたと喜んで喜ぶが、もっと年とった女たちのうちには、どんな深い悲しみでもほんとうの貴婦人たるものに“noblesse oblige”¹³⁾を忘れさせるはずがないと言って非難するものもいる。こういった婦人たちのことばは、北部人に対する南部人の誇りの表われといえる。町の人々の目にはエミリーがおちぶれたかのように見えるが、南部の象徴ともいえるエミリーはそんな時でも頭を高くあげている。

She carried her head high enough—even when we believed that she was fallen. It was as if she demanded more than ever the recognition of her dignity as the last Grierson; as if it had wanted that touch of earthiness to reaffirm her imperviousness.¹⁴

エミリーは決して南部人としての誇りを失ったわけではなく、北部人のホーマー・バロンとデートするようになって、その誇りを持ち続けているのである。

そのうちに町の人々はエミリーがホーマー・バロンと結婚するだろうと思うようになり、南部人としての誇り高い婦人たちの中には、エミリーとホーマー・バロンの交際は町の不名誉であり、若いものたちに良くない手本を示すものだと思われ、非難するものもでてくる。そして、エミリーの親類をアラバマから呼んでホーマー・バロンとの結婚をやめるように説得してもらおうとする。

このような状況になったある日、エミリーは薬局で砒素を買うのであるが、その時の彼女の様子は、“Miss Emily just stared at him, her head tilted back in order to look him eye to eye”¹⁵とあるように、彼女が誇りを持ち続けていることを表わしている。エミリーが砒素を買ったことを知った町の人々は彼女が自殺するのではないかと考える。しかし、彼女が宝石屋へ出かけて行って、男物の銀の化粧道具一式を注文し、その一つ一つにH・Bという頭文字を刻ませたこと、さらに2日後に寝巻を含めて男物の衣類をそっくり一そろい買ったことなどを知って、町の人々はエミリーが結婚したんだと考えるようになる。ところが実際は、エミリーは自殺するわけでもないし、ホーマー・バロンと結婚するわけでもない。ただホーマー・バロンがある日エミリーの家の台所の入口から中へ入ったとき2度と姿をあらわさなくなってしまうのである。エミリーとホーマー・バロンがどうなったのか、町の人々にも、そして読者にも、物語の最後の部分にいたるまでわからない。ホーマー・バロンが姿をあらわさなくなつてからは、エミリーの家の玄関の扉はしめたときりであり、時おり窓のところに“the carved torso of an idol in a niche”¹⁶のようなエミリーの姿を見かけるのみである。そういった状態で年月が過ぎ、エミリーもだんだん年をとり、髪の毛は霜降りの鉄灰色となって、彼女が74才で死ぬ日までその色は変わらない。彼女は“dear, inescapable, tranquil, and perverse”¹⁷な女としてひとつの世代から次の世代へと移っていき、埃と陰にみちた家で病に倒れ、ひとりさびしく死ぬ。

エミリーが死んでからはじめて、即ち最後の章へきてはじめて、この作品のすべてを握るかぎが明らかにされる。なぜエミリーが砒素を買ったのか、なぜホーマー・バロンがエミリーの家の中に姿を消して2度とあらわれなかったか、なぜエミリーは結婚の準備と思われるようなものを買ったのか、といったことがすべて明白になるのである。町の人々はエミリーを埋葬したあとで、過去40年間の間、誰も見たことのない2階の部屋の扉をぶちこわして中に入る。その部屋はまるで新婚のために調えられたようなバラ色の部屋であり、そこには以前にエミリーがホーマー・バロンとの結婚の準備に買ったと思われるものが置かれているが、あらゆるものの上に40年間のほこりがおおいかぶさっている。そしてベッドには、ホーマー・バロン自身が横たわっており、なかば朽ちはててミイラのような体は、かつては抱擁の姿勢をとっていたものと思われる。いくらかでも残った肉体は、いくらかでも残った寝巻の下で朽ちはてて、ベッドから引きはがすこともできなくなっており、その体の上にも、またかたわらの枕の上にもほこりの薄い膜がむらなくかぶっている。エミリーは恋人ホーマー・バロンとの愛の抱

擁の最中に、彼に砒素をのませて殺したのであった。

だがさらに大きな衝撃は、これに続く最後の1節である。

Then we noticed that in the second pillow was the indentation of a head. One of us lifted something from it, and leaning forward, that faint and invisible dust dry and acrid in the nostrils, we saw a long strand of iron-gray hair.¹⁸⁾

なかばミイラのようになって横たわっているホーマー・パロンのとなりにあるもうひとつの枕には、エミリーのあの鉄灰色の髪の毛があった。つまり、エミリーはあのバラ色の新婚のための部屋で、愛の抱擁の最中に恋人を殺した後、40年もの間、しばしば恋人の死体といっしょに寝ていたと考えられるのである。

ではなぜエミリーは恋人のホーマー・パロンを殺したのであろうか。そしてなぜ死体といっしょに寝ることができたのであろうか。それを考えるには、エミリーにとって死は何であったのか、また彼女にとって過去とは何であったのかを知る必要がある。ここに、エミリーの葬式にやってきた老人たちにとって過去とは何であったかを描いた部分がある。

……the past is not a diminishing road but, instead, a huge meadow which no winter ever quite touches, divided from them now by the narrow bottle-neck of the most recent decade of years.¹⁹⁾

老人たちにとって、過去は「最近の10年という狭いびんの首によって現在の彼らからへだてられている、そして、冬が決して触れることのない広々とした牧場」だったのである。エミリーにとってもまた過去はこういうものであったと思われるが、ただ一つちがうのは、彼女にとって「狭いびんの首」は存在しなかったということである。即ち、彼女にとって、過去は過ぎ去ったものではなく、彼女が身をおいている世界そのものが過去の世界であった。また、死はある意味では過去であり、時間の流れのない、永久に変わることのない世界であった。だからエミリーは恋人を殺してしまえば、彼を永久に変わらぬ世界へとつれこむことができた。もし殺さなかったならば、結婚するつもりのないホーマー・パロンにすてられたかもしれないが、彼を殺したために、エミリーはいつまでも彼を彼女だけの世界においておくことができたと考えられる。そして、二人のために調べたあのバラ色の部屋は、時の流れのないよどみであり、過去の世界そのものであったといえる。結局、エミリーの悲劇は、過去から現在への時間の流れに逆って、常に過去にしがみついていたが故の、南部の悲劇であるといえよう。

注

- 1) Faulkner, William: "A Rose for Emil" *These Thirteen*, 9, Chatto and Windus, London (1963).
- 2) *Ibid.*, 9.
- 3) *Ibid.*, 11.
- 4) *Ibid.*, 9.
- 5) *Ibid.*, 10.
- 6) *Ibid.*, 10.
- 7) *Ibid.*, 11.
- 8) *Ibid.*, 13.

- 9) *Ibid.*, 13.
- 10) *Ibid.*, 14.
- 11) West, Ray B.: "Atmosphere and Theme in Faulkner's 'A Rose for Emily'," in *William Faulkner: Three Decades of Criticism*, ed. Frederick Hoffman and Olga Vickery, 262, Michigan State University Press, East Lansing (1960).
- 12) Faulkner, William: "A Rose for Emily," *These Thirteen*, 14.
- 13) *Ibid.*, 14.
- 14) *Ibid.*, 15.
- 15) *Ibid.*, 16.
- 16) *Ibid.*, 18.
- 17) *Ibid.*, 18.
- 18) *Ibid.*, 20.
- 19) *Ibid.*, 19.